少子・高齢化社会に対応した公園緑地基準の検討

The examination of the park and open space standard
corresponding to declining birthrate and aging

（研究期間　平成 14～17 年度）

環境研究部　緑化生態研究室	室　長	松江　正彦
Environment Department	Head	Masahiko　MATSUE
Landscape and Ecology Division	研究官	米澤　直樹
	Researcher	Naoki　YONEZAWA

It is said that the activity of a child's mind and body is falling rapidly. It is considered as a cause that many problems in connection with growth environment, such as aggravation of play environment, loss of natural experience, a physical strength fall, and reduction in the age of geriatric diseases, are aggravating this with social change, such as urbanization, natural destruction, the trend toward the nuclear family, and a decrease in the birthrate. Although a city park is considered that the role which came for mind-and-body activation sure enough as a child's familiar playground is large, the state of the park based on the above social situations fully needs to be examined. Then, it inquires for the purpose of performing grasp and analysis of the use actual conditions, such as a basic park for neighborhood a child's familiar playground, and performing arrangement of the park for a child, and the proposal of an institution indicator.

［研究目的及び経緯］

子どもの心身の活性が急激に低下しつつあるといわれている。これは、都市化や自然破壊、核家族化、少子化などの社会的変化に伴い、遊び環境の悪化や自然体験の喪失、成人病の低年齢化など、生育環境に関わる諸問題が深刻化していることに起因すると考えられている。

都市公園が子どもの身近な遊び場として心身活性化に果たしてきた役割は大きいものがあると考えられるが、今後は、上記のような社会状況を踏まえた公園のあり方が十分に検討される必要がある。

本研究は、子供の身近な遊び場である住区基幹公園の利用実態の把握・分析を行い、子供のための公園の配置、施設指針の提案を行うことを目的としており、平成16年度は、地方都市部における住区基幹公園の利用実態を把握するため、茨城県つくば市の東小学校区域内にある住区基幹公園の利用実態調査を実施した。

［調査概要］

１．調査対象公園

調査対象公園は、つくば市の東小学校区域内にある 8 公園（地区公園：1、近隣公園：1、街区公園：6）とした（表－1 および図－1）。

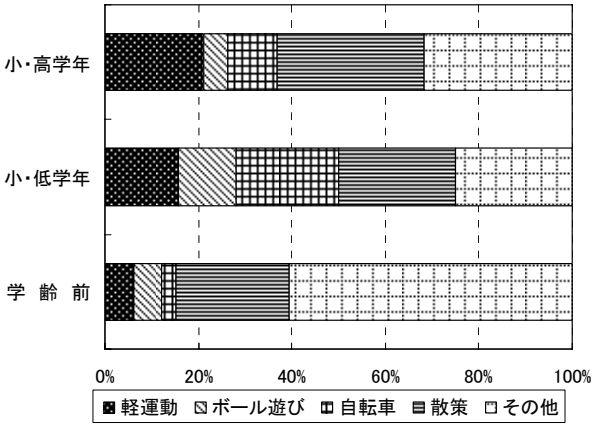
２．調査内容

入退園調査、活動内容調査、利用者追跡調査、アンケート調査を実施し、調査対象公園の利用実態を把握した。

表－1　調査対象公園の概要

項　目	概　要		
名　称	赤塚公園	梅園公園	山ゆり公園、ひまわり公園、鍛冶ヶ台公園、鷺沼児童公園長峯児童公園、二本松児童公園
種　別	地区公園	近隣公園	街区公園
面　積	86,000 ㎡	20,085 ㎡	2,257 ㎡ ～ 5,757 ㎡
主な施設	郷土の森、プロムナード、芝生広場、流れ・池、花の森、野草の丘、トイレ、駐車場	梅林広場、多目的運動広場、休憩舎、トイレ、集会所	芝生広場、砂場、ブランコ、スベリ台、シェルター、鉄棒、回転イス、複合遊具

図－1　調査対象公園の位置



図－2　赤塚公園における子どもの活動内容

［調査結果］

本報告では、活動内容調査について述べる。この調査は、学齢前児童、小学校低学年および高学年を「子ども」と定義し、公園来園者の中から、子どももしくは、子どもを含むグループの活動内容（遊びの種類）を調査し、「軽運動」「ボール遊び」「自転車」「散策」「遊具遊び」「その他」に分類したものである。

赤塚公園の調査結果を**図－2** に示す。学齢前児童では、植物で遊んだり、池や流れで遊んだりする「その他」の占める割合が 61%と高かった。小学校低学年や小学校高学年では「その他」の占める割合が低くなり、「軽運動」「ボール遊び」「自転車」の占める割合が高くなった。

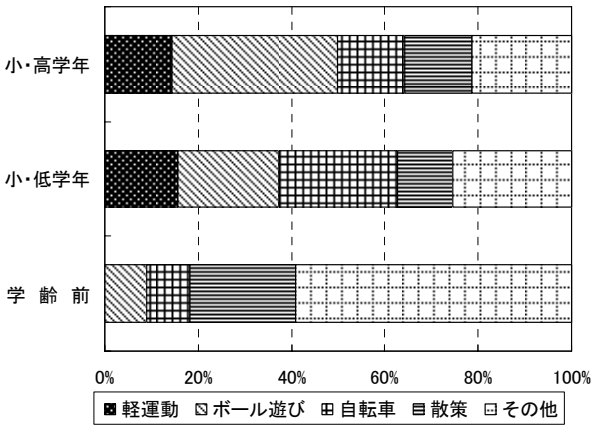
梅園公園の調査結果を**図－3** に示す。学齢前児童は、赤塚公園と似た傾向を示していた。小学校低学年や小学校高学年では、学齢前児童で 0%であった「軽運動」が 15%程度を占め、「ボール遊び」「自転車」の占める割合も高くなっていた。

街区公園の調査結果を**図－4** に示す。学齢前児童では、ブランコやすべり台、複合遊具といった「遊具遊び」が 74%を占めていた。小学校低学年や小学校高学年においても「遊具遊び」の占める割合は高く（小学校高学年：35%、小学校低学年：45%）、この他に「ボール遊び」の占める割合も高くなっていた。

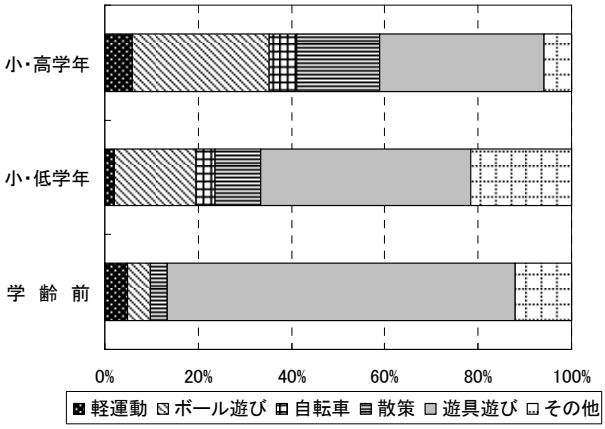
［まとめ］

ブランコやすべり台、複合遊具といった「遊具」を備えていない赤塚公園や梅園公園を除き、それ以外の公園では、遊具を使った遊びが中心となっていた。また、年齢が低いほどその傾向が高いことが示された。

今後は、本調査結果と過年度に実施した都市部における住区基幹公園の利用実態調査の結果を比較・考察し、子どものための身近な都市公園のあり方について検討する予定である。



図－3　梅園公園における子どもの活動内容



図－4　街区公園における子どもの活動内容
（山ゆり公園、ひまわり公園、鍛冶ヶ台公園、鷺沼児童公園、長峯児童公園、二本松児童公園における調査結果の合計）